〔C 年〕降誕前節第５主日(2026 年 11 月 22 日)

【旧約聖書日課】サムエル記下　5章1～5節

1イスラエルの全部族はヘブロンのダビデのもとに来てこう言った。「御覧ください。わたしたちはあなたの骨肉です。2これまで、サウルがわたしたちの王であったときにも、イスラエルの進退の指揮をとっておられたのはあなたでした。主はあなたに仰せになりました。『わが民イスラエルを牧するのはあなただ。あなたがイスラエルの指導者となる』と。」

3イスラエルの長老たちは全員、ヘブロンの王のもとに来た。ダビデ王はヘブロンで主の御前に彼らと契約を結んだ。長老たちはダビデに油を注ぎ、イスラエルの王とした。

4ダビデは三十歳で王となり、四十年間王位にあった。5七年六か月の間ヘブロンでユダを、三十三年の間エルサレムでイスラエルとユダの全土を統治した。

【使徒書日課】

コリントの信徒への手紙一　15章20～28節

20しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となられました。21死が一人の人によって来たのだから、死者の復活も一人の人によって来るのです。22つまり、アダムによってすべての人が死ぬことになったように、キリストによってすべての人が生かされることになるのです。23ただ、一人一人にそれぞれ順序があります。最初にキリスト、次いで、キリストが来られるときに、キリストに属している人たち、24次いで、世の終わりが来ます。そのとき、キリストはすべての支配、すべての権威や勢力を滅ぼし、父である神に国を引き渡されます。25キリストはすべての敵を御自分の足の下に置くまで、国を支配されることになっているからです。26最後の敵として、死が滅ぼされます。27「神は、すべてをその足の下に服従させた」からです。すべてが服従させられたと言われるとき、すべてをキリストに服従させた方自身が、それに含まれていないことは、明らかです。28すべてが御子に服従するとき、御子自身も、すべてを御自分に服従させてくださった方に服従されます。神がすべてにおいてすべてとなられるためです。

【福音書日課】ルカによる福音書　23章35～43節

35民衆は立って見つめていた。議員たちも、あざ笑って言った。「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」36兵士たちもイエスに近寄り、酸いぶどう酒を突きつけながら侮辱して、37言った。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」38イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王」と書いた札も掲げてあった。39十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」40すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。41我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」42そして、「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」と言った。43するとイエスは、「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。

「聖書協会共同訳」（2018 年版）読み比べ

サムエル記下　5章1〜5節

1イスラエルのすべての部族はヘブロンのダビデのもとに来て、こう言った。「御覧ください。私たちはあなたの骨肉です。2これまで、サウルが私たちの王であった時にも、イスラエルの進退を決めていたのはあなたでした。主はあなたに仰せになりました。『わが民イスラエルを牧するのはあなただ。あなたがイスラエルの指導者となる。』」

3イスラエルの長老たちは皆、ヘブロンの王のもとに来た。ダビデ王はヘブロンで主の前に彼らと契約を結び、彼らはダビデに油を注いでイスラエルの王とした。

4ダビデは三十歳で王位につき、四十年間統治した。5ヘブロンで七年六か月の間ユダを統治し、エルサレムで三十三年間イスラエルとユダの全土を統治した。

コリントの信徒への手紙一　15章20〜28節

20しかし今や、キリストは死者の中から復活し、眠りに就いた人たちの初穂となられました。21死が一人の人を通して来たのだから、死者の復活も一人の人を通して来たのです。22つまり、アダムにあってすべての人が死ぬことになったように、キリストにあってすべての人が生かされることになるのです。23しかし、一人一人にそれぞれ順番があり、まず初穂であるキリスト、次いで、キリストが来られるときに、キリストに属する人たち、24それから、世の終わりが来ます。その時、キリストはあらゆる支配、あらゆる権威と勢力を無力にして、父である神に国を引き渡されます。25キリストはすべての敵をその足の下に置くまで、国を支配されることになっているからです。26最後の敵として、死が無力にされます。27「神は、万物を、その足元に従わせた」からです。「万物が従わせられた」と言われるとき、万物をキリストに従わせた方がそれに含まれていないことは、明らかです。28万物が御子に従うとき、御子自身も、万物をご自分に従わせてくださった方に従われます。神がすべてにおいてすべてとなられるためです。

ルカによる福音書　23章35〜43節

35民衆は立って見つめていた。議員たちも、嘲笑って言った。「他人を救ったのだ。神のメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」36兵士たちもイエスに近寄り、酸を差し出しながら侮辱して、37言った。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」38イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王」と書いた罪状書きも掲げてあった。

39はりつけにされた犯罪人の一人が、イエスを罵った。「お前はメシアではないか。自分と我々を救ってみろ。」40すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。41我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」42そして、「イエスよ、あなたが御国へ行かれるときには、私を思い出してください」と言った。43するとイエスは、「よく言っておくが、あなたは今日私と一緒に楽園にいる」と言われた。

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

・11 月 22 日「降誕前節第 5 主日」の日課主題は「」。
・旧約日課は、「サムエル記」から、ダビデがユダとイスラエルの王に即位した経緯を描く箇所。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙一」から、死者の復活の意味を説く一連の箇所の一部。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、十字架上の主イエスが隣の十字架につけられた犯罪人と交わした会話の箇所。

旧約日課(サムエル下 5 章より)

・「サムエル記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)の区分で「前の預言者」の第三巻に位置する歴史物語文書。カナン定住時代の「イスラエル正史物語」を展開する「前の預言者」の中で、サウルおよびダビデがイスラエルおよびユダの王として立てられていく「王国草創期」が物語られている。ただし、実際の本書の構成は、「預言者サムエルとサウル王の伝承」と「ダビデ王の伝承」という大きな伝承物語が組み合わされることによって編まれており、「前の預言者」の他書と文学様式に違いがみられる。本書は、上下巻に分けて扱われているが、本来は一巻本として編まれたものが便宜上、上下巻に分けて扱われるようになったものとされている。とは言え、上巻が「預言者サムエルとサウル王の物語」、下巻が「ダビデ王の物語」と分けても差し支えない構成になっている。
・日課箇所は、ダビデがイスラエルの長老たちから油を注がれて「イスラエルの王」に即位した出来事を物語る。ダビデは、「イスラエルの王」であったサウルの死後すぐに「ユダの人々」に油を注がれて、すでに「ユダの王」に即位していた(サム下 2:1~4)。その時点で、「イスラエルの王」は、サウル王の子の一人イシュ・ボシェトによって継承されていたが(同 2 章)、イスラエル王国サウル王家の実権を握っていた「アブネル」がユダ王国ダビデ王と通じるなどした結果(同3章)、サウル王朝が崩壊し(同 4 章)、それまでサウル王家を支持していたイスラエル諸部族がダビデ王の傘下に入ることになった(同 5 章)、と物語られている。
・そもそも本書では「イスラエル」と「ユダ」を明確に区別される部族集団として描いている。本書上巻の「サウル王物語」でも、ベニヤミン族出身のサウルは、北部諸部族の支持を得て「イスラエルの王」とされたが、南部のユダ族はそこに含まれておらず、サウル王の「イスラエル王国」が「ユダ族の国」を従属させるという関係性で描かれている。ダビデやその兄弟たちも、「宗主国イスラエル」に従属する「ユダ族」の者としてサウル王に従わせられている、と解せる。この関係性を逆転させたのがダビデ王であったと描くのが本書であり、ダビデ王は、「イスラエル統一王国の王」というのではなく、飽くまでユダ族出身でありながら「ユダとイスラエルの連合王国」の王の地位に立った者という位置づけで描かれている。なお、サウル王家は粛清されずにダビデ王家の臣下になったとされている。
・ダビデ王は、「ユダの王」に即位した際には「ヘブロン」を王都としていたが、「イスラエルの王」を兼ねるようになってから「エルサレム」を新たな王都として奪取したとされる(5:6~12)。「エルサレム」は、ダビデを王として立てたユダやイスラエルの人々自身の町でさえなかったが、先住民エブス人から奪取したのである。「エルサレム」は、地理的にユダ族とベニヤミン族を隔てる境界領域にあった町であり、この地域に専従する人々の存在によって両部族は隔てられていたのだろう。他方でベニヤミン族は他の北部諸部族との一体化が進み得る地理的位置にあったため、サウル王は、北部諸部族を束ねる王となり得た。ダビデが「ユダ」と「イスラエル」の両王国を統治する者として境界領域に位置する「エルサレム」を新たに得ることは必須だったと考えられる。

使徒書日課(Ⅰコリント 15 章より)

・「コリントの信徒への手紙一」は、「パウロ書簡集」の第二に置かれた書簡文書。パウロは、独自の宣教団を組織して進めたマケドニア伝道やアテネ伝道で多くの成果を得られないまま活動を一時休止するために滞在したコリントで、同地に一時移住してきていたローマの教会共同体出身のユダヤ人らを中心に始められた宣教と教会形成に参与することになり、コリント教会に関わり続けることになった。彼は同地を離れた後も同教会の中の支持者を通じてさまざまな問題を耳にし続けたため、助言を与えようと記したのが、本書である。ただし、助言は必ずしも受け入れられず、むしろ両者の関係が悪化したため、パウロは繰り返し書簡を送り続け、最終的には自分から和解を呼びかけるために「手紙二」を記したと推認される。
・日課箇所は、本書簡の最終盤で取り上げた「死者の復活に関する言説」(15 章)の一部。パウロは、本書簡で「教会の土台となる信仰共同体論」を展開しており、その最後に、「教会」が「ペトロ」に始まる「復活のキリスト」が現れてくださった者たちによって形成されてきたところであると言及した(15:1~11)。しかし、ここで「復活」懐疑論者の存在に思い当たり、「復活論」を展開することになったのである。
・パウロらが論じる「復活」信仰には、「終末におけるすべての者の復活」と「現在におけるキリストの復活」の両者が含まれるが、前者はユダヤ教でファリサイ派を中心に広く共有されていた観念であり、後者の前提でもあった。前提となる「終末におけるすべての者の復活」は、いわゆる「最後の審判」として語られるような人の最終的な行く末を決する機会がある、という信仰概念。その審判に耐えうるように「神の戒め」を守って生きるという思想が成り立つ一方で、「キリストの復活」を信じる者は、その審判が「キリスト」の出来事によってすでに起こされ、滅びではなく永遠の命という行く末を約束される道が開かれた、ということの確信として「キリストの復活」を信じた。いわば、「最後の審判」が肯定的に先取りされた、と信じたのである。

福音書日課(ルカ 23 章より)

・日課箇所は、十字架上の主イエスが、人々から罵られる中で、彼と共に十字架につけられた二人の犯罪人と交わした言葉を伝える箇所。十字架につけられた主イエスの様子は、四福音書が同様に伝えているが、その詳細については各福音書が独自の視点や伝承に基づいて描いている。主イエスが二人の犯罪人と共に十字架につけられたことは、四福音書が共通して明言していることであるが、彼らと言葉を交わしたとの逸話は「ルカ」独自の伝承。

・主イエスと共に十字架につけられた二人の「犯罪人(カクールゴス)」(32,33,39 節)の詳細については、「マタイ」および「マルコ」が「強盗(レーステース)」としているほかは、何も知られていない。「犯罪人」と訳されている「カクールゴス」の原義は「悪い行い(をする者)」。「強盗」と訳されている「レーステース」の原義は「強奪する者」。

・十字架上の主イエスを人々が罵る言葉として取り上げられる「ユダヤ人の王なら…」という表現は、十字架上に掲げられた罪状書き「これはユダヤ人の王」と関連して触れられている。「ヨハネ」によると、この罪状書きは総督ピラトの指示で作製され、ヘブライ語、ラテン語、ギリシア語で記されていた(ヨハネ 19:19～20)。ピラトがユダヤ総督であった時代、ユダヤ地方はヘロデ家の支配から離れたローマ直轄属州として扱われ、総督の支配下にあった。他方で、ガリラヤ地方などは、ヘロデ家二代目の兄弟たちが領主として支配していた。総督ピラトは、「ユダヤ人の王」を称した者として訴えられた主イエスを実際に「ユダヤ人の王」という罪状で処刑することで、ユダヤ地方におけるユダヤ人自身の支配の望みを断とうとした、と解することができるかもしれない。しかし、「マタイ」「マルコ」「ルカ」は、この罪状書きをピラトの指示とは明言しておらず、むしろ、ユダヤ人自身が自分たちの王の処刑を望み、自分たち「ユダヤ人の王」を罵ったと描くことで、彼らのイエスに対する否定的態度を強調し、またその神学的意義(イザヤ書の「苦難の僕」論など)を示そうとしている、と解することもできる。

・42 節「あなたが御国においでになるときには」の直訳は、「あなたがあなたの国に行かれるときには」。「ルカ」には、多数の「神の国」の用例があるが、主イエス自身の「国」という明確な表現は、この箇所の他には 22:30「わたしの国」のみ。「ルカ」は、「神の国」を「あなたがたの間にある」(17:21)ものとして主イエスに語らせており、主イエスを「王」として自分たちの間に迎える者こそが「神の国」の現臨の中にいる者であると理解していると思われる。

・43 節「はっきり言っておくが」は、ギリシア語「アメーン」の訳。「アメーン」は、ヘブライ語で「真に／本当に」を意味する語の音訳。「楽園」は、ギリシア語「パラデイソス」の訳。「パラデイソス」は、ペルシア語で「天国」を意味する語の音訳とされる。

来週の誕生日 (11 月 22 日～28 日)

加藤広子、旭真澄、清水知恵子、根本政治

主日礼拝の讃美歌から

・21-358「小羊をばほめたたえよ！」(＝Ⅰ164 番「こひつじをばほめたたうる」)は、19 世紀英国の詩人ブリッジズの原作を国教会司祭スリングが修正、また全面改訂した結果生まれた諸版が混同再録されてきた讃美歌で、『讃美歌 21』は米国聖公会版からの翻訳。曲は、19 世紀英国王室チャペルのオルガニスト・エルヴィーの作曲。

・21-169「ハレルヤ、主をほめたたえ」は、18 世紀ドイツの敬虔派牧師ヨハン・ヘルンシュミットが詩編 146 に基づいて作詞。曲は、17 世紀の作曲者不詳

・21-476「あめなるよろこび」(＝Ⅱ150 番)は C.ウェスレーの代表的な讃美歌の一つ。『讃美歌 21』で改訳されている。曲は、ドイツ生まれでアメリカで活躍した音楽家ザンデルの作。日本では別の曲(475 番＝Ⅰ352 番)との組み合わせで歌われてきたが、476 番の曲や別の曲が近年は標準になっている。

21-358「小羊をばほめたたえよ」

Crown Him with Many Crowns

1. Crown him with many crowns, / the Lamb upon his throne; / Hark! how the heavenly anthem drowns / all music but its own; / awake, my soul, and sing of him / who died for thee, / and hail him as thy matchless King / through all eternity.
2. Crown him the Son of God / before the worlds began, and ye, / who tread where he hath trod, / crown him the Son of man; / who every grief hath known / that wrings the human breast, /and takes and bears them for his own, / that all in him may rest.
3. Crown him the Lord of life, / who triumphed over the grave, / and rose victorious in the strife / for those he came to save; / his glories now we sing, / who died, and rose on high, / who died, eternal life to bring, / and lives that death may die.
4. Crown him of lords the Lord, / who over all doth reign, / who once on earth, the incarnate Word, / for ransomed sinners slain, / now lives in realms of light, / where saints with angels sing / their songs before him day and night, / their God, Redeemer, King.
5. Crown him the Lord of heaven, / enthroned in worlds above; / crown him the King,to whom is given, / the wondrous name of Love. / Crown him with many crowns, / as thrones before him fall, / crown him, ye kings, with many crowns, / for he is King of all.

21-169「ハレルヤ。主をほめたたえ」

Lobe den Herren, o meine Seele

21-476「あめなるよろこび」

Love Divine, All Loves Excelling

1. Love divine, all loves excelling, / Joy of heaven to earth come down; / Fix in us thy humble dwelling; / All thy faithful mercies crown! / Jesus, Thou art all compassion, / Pure unbounded love Thou art; / Visit us with Thy salvation; / Enter every trembling heart.
2. Breathe, O breathe Thy loving Spirit, / Into every troubled breast! / Let us all in Thee inherit; / Let us find that second rest. / Take away our bent to sinning; / Alpha and Omega be; / End of faith, as its Beginning, / Set our hearts at liberty.
3. Come, Almighty to deliver, / Let us all Thy life receive; / Suddenly return and never, / Never more Thy temples leave. / Thee we would be always blessing, / Serve Thee as Thy hosts above, / Pray and praise Thee without ceasing, / Glory in Thy perfect love.
4. Finish, then, Thy new creation; / Pure and spotless let us be. / Let us see Thy great salvation / Perfectly restored in Thee; / Changed from glory into glory, / Till in heaven we take our place, / Till we cast our crowns before Thee, / Lost in wonder, love, and praise.